

高等学校の共学校化に伴う運動部強化の現状と課題 - 硬式野球部の事例から

The Current Situation and Problems of Enhanced Sports Departments at Coeducationalized High Schools - A Case Study of Baseball Clubs -

林 卓史

HAYASHI Takafumi

hayashi@alice.asahi-u.ac.jp

<要 旨>

少子化により若年層人口の減少を迎えたなかで、高等学校は特色を出すことによって生き残りを図る必要に迫られている。特に女子高等学校は全国的に入学定員充足率が低いことから、共学校化することで生徒数を確保するケースが増加している。

林(2007)は、大学硬式野球部の存在意義について半構造化インタビュー調査をおこなった。それによると、地方の大学野球部ではチームの強化に加えて、学生数の確保を重視していることが示唆された。先の知見を参考にしつつ、本研究では女子高等学校から共学校化した高等学校の硬式野球部の存在意義と、その創部とチーム強化が学校に与える影響に関して、半構造化インタビュー手法を用いて検討した。

その結果、(1)硬式野球部の存在意義は名称変更した校名の知名度アップや学校のイメージ作りにあること、(2)硬式野球部を強化することによって、卒業生の結束力強化や母校への帰属意識向上といった好影響がみられることが分かった。また、好影響を維持するために、指導者は不祥事防止に対して細心の注意を払うべきであることが示された。

1. 研究の背景と目的

1.1. 15歳人口の推移

わが国で高等学校に入学する15歳の人口は、平成元年の204.9万人をピークに減少を続け、平成20年には120万人を下回った。平成20年の出生数は98.7万人であることから、少子化の傾向は今後も続くことが予想される。また、大都市では今後10年ほど15歳人口が横ばいに推移するが、地方では引き続き減少する。こうした影響を受けて、私立の高等学校では一校当たりの生徒数が減少している。しかし、志願者数の減少は定員の削減数を上回っており、結果として出願倍率と入学定員充足率が低下を続けている¹⁾。

1.2. 女子高等学校の共学校化

男女校種別の動向をみると、平成20年度において志願倍率と入学定員充足率が高いのは共学校、男子高等学校、女子高等学校の順である。女子高等学校は過去15年の調査をみても志願倍率、入学定員充足率とも他の2種と比較して最も減少率が大きくなっている。また、平成4年度の調査と比較すると平成20年度までに女子高等学校は189校減少、男子高等学校は127校減少している一方で、共学校は315校増加している。このことから、わが国の高等学校では共学校化することによって、入学者を確保しようとする傾向があることが読み取れる²⁾。

1.3. 本研究の目的

多くの高等学校が共学校化していく中で、特に女子高等学校から共学校化した高等学校野球部の活躍が目立ち始めているⁱⁱ。しかし、その実態（創部の経緯・目的等）は明らかにされていない。

そこで本研究では、女子高等学校から共学校化され野球部強化に成功している高等学校二校に着目し、硬式野球部を創部した目的や経緯及び現状・課題を考察することを目的とした。具体的には以下の二点に限定し考察する。

- ① 女子高等学校から共学校化された高等学校における硬式野球部の実態を明らかにし、その存在意義を考察すること。
- ② 硬式野球部の創部とチーム強化が高等学校にもたらした影響を明らかにし、その課題を考察すること。

2. 先行研究 - 大学硬式野球部への調査

ここでは、本研究に関連する林（2007）の先行調査を概観することで、本研究の位置付けを明らかにする。

林（2007）は、地方大学における硬式野球部のマネジメントについて研究をおこない、以下のことが明らかにされたⁱⁱⁱ。

- ① 都心部の大学では大学当局から「愛校心の養成」や「イメージ作り」といった抽象的な役割が求められているのに対して、地方大学では学生募集という大学経営に、より直結した役割が期待されている。そのため、都市部の大学の硬式野球部員数は65名から120名程度であったのに対して、地方大学は100名から200名ほどの部員を抱えている。
- ② 特徴的な硬式野球部のマネジメントとして、ある地方大学の硬式野球部では指導者が部員を顧客ととらえて、満足度を高めるための施策を実施している。具体的にはチーム強化はもちろんのこと、授業への出席や卒業単位取得の促進、就職支援、練習メニューや部内イベントの充実などをおこなっている。
- ③ チーム強化の観点のみならず、部員の時間的制約や経済的負担を軽減させる意味からも、練習施設の充実が重要な意味を持っている。

これらの3つの知見が、共学校化により創部された高等学校硬式野球部の現状に対しても関連性を持つと推定できる。

3. 共学校化により創部された高等学校硬式野球部への調査

3.1. 採用した調査の方法

今回は、女子高等学校から共学校化した高等学校の硬式野球部監督に対して、半構造化インタビュー調査を行った。半構造化インタビューを用いた理由は、質問紙などによるインタビューなどと比較して、自由度が高いオープンな状況の中で、インタビューの視点、考え方を明らかにできるからである。インタビューは電話で行い、インタビュアーはインタビューの話をもとにメモした。

3.2. 調査の対象

インタビューは地方都市にある私立X高等学校硬式野球部A監督と、地方都市にある公立Y高等学校硬式野球部B監督の計2名である。この2校を選んだ理由は、平成4年度以降に共学校化され、野球部の強化が極めて順調に進んでいるという特徴を有しているからであった。

3.3. 調査項目の選定

半構造化インタビューの質問項目は7問あり、これらは先行研究の知見を参考にリストアップしたものである。具体的な半構造化インタビュー項目は表1に示した通りである。

表1 半構造化インタビュー項目

Q1. 監督就任以前のキャリアについて
Q2. 学校の共学校化への経緯について
Q3. 硬式野球部の存在意義について
Q4. チーム強化の成果について
Q5. 全校生徒数における硬式野球部員の割合について
Q6. 硬式野球部の創部とチーム強化が学校にもたらした影響について
Q7. 練習施設について

4. 調査の結果と考察

4.1. 調査結果

インタビュー結果の主要となる部分の要約を、私立X高等学校と公立Y高等学校に分けて次に示す。

4.1.1. 私立X高等学校硬式野球部A監督へのインタビュー結果

私立X高等学校硬式野球部A監督へのインタビュー結果を表2に示す。このインタビュー結果の中で特徴的だった点は、「甲子園出場がすべて」という発言とともに、生活指導を徹底することで、不祥事を防止しイメージ作りや知名度アップを図っていることが分かった。

表2 私立X高等学校硬式野球部A監督へのインタビュー結果

質問1. 監督就任以前のキャリアについて

中学校軟式野球部で11年間監督を務める。全国大会で好成績を収めていた。また、卒業生がプロ野球に入団するなどの指導実績を残した。独特の理論を展開することから異色の監督とみなされている^{iv}。

質問2. 学校の共学校化への経緯について

1990年代に共学校化して、校名が変更された。当初は他種目の運動部の強化を図ったが、思うような成果が出ず、目的を達することができなかつたため、硬式野球部の強化へと計画を変更した。

質問3. 硬式野球部の存在意義について

就任にあたって、経営者から求められた要望は「甲子園出場が全てⁱⁱ²」とのことだった。

質問4. チーム強化の成果について

最高成績としては高等学校硬式野球部の全国大会（甲子園）に数回出場し、上位進出も果たして

いる。

質問5. 全校生徒数における硬式野球部員数の割合について

全校生徒は約1,100名。男女比はほぼ半数ずつである。硬式野球部員は各学年20名程度である。創部後しばらくは、部員数を増やした時期もあった。しかし、学校当局は部員数の増加よりもチーム強化を優先させる意向をもっていった。学校当局の意向に加えて、部員全員に生活指導を徹底するために、現在では部員数を指導者の目が行き届く範囲内に収めている。

質問6. 硬式野球部の創部とチーム強化が学校にもたらした影響について

硬式野球部員のおかげで、校内に規律が生まれたという評価を得ている。たとえば、硬式野球部員はたとえ上級生に対しても、列の割り込みなどのマナー違反を毅然と指摘している。その一方で、創部当初は部員の生活指導面で多くの苦労があったことが示唆された。

質問7. 練習施設について

校舎から離れたところに、専用の練習場が整備されている。また、室内練習場が完備されている。

4.1.2. 公立Y高等学校硬式野球部B監督へのインタビュー結果

公立Y高等学校硬式野球部B監督へのインタビュー結果を表3に示す。このインタビュー結果の中で特徴的だった点は、野球部が強化される一方、規律を保つ野球部生徒の存在が、創部に対する懐疑的な意見を覆し校風の醸成やイメージ作りに貢献したという評価を得たことである。野球部の強化により、応援を通じて女子高等学校時代の卒業生の結束力や帰属意識が強化されたことも特徴として挙げられる。

表3 公立Y高等学校硬式野球部B監督へのインタビュー結果

質問1. 監督就任以前のキャリアについて

中学校軟式野球部で19年間監督を務める。全国大会への出場経験がある。

質問2. 学校の共学校化への経緯について

県内でトップクラスの進学校。志願者数も県内有数の水準。2000年代に共学校化。

質問3. 硬式野球部の存在意義について

「元来、文武両道を校風とする学校だった」とのことであり、共学校化が決定した時点では、用地の関係などから創部が予定されておらず、「野球部ってどうなの」と当初は野球部の存在に対して懐疑的な意見もあったとのことだった。しかし、生活指導を厳しく行うことにより、野球部の生徒が規律を創り出しているという学校関係者からの評価を得るまでになった。

質問4. チーム強化の成果について

最高成績は県大会上位進出、県内ブロック大会出場などの成績を収めている。

質問5. 全校生徒数における硬式野球部員数の割合について

全校生徒は約1,250名。男女比はほぼ4:6。硬式野球部員は各学年20名程度。推薦入学枠の増加を学校側に要望している。

質問6. 硬式野球部の創部とチーム強化が学校にもたらした影響について

卒業生の結束や母校への帰属意識が高まったとの評価を得ている。前身校からの文武両道のイメージを、野球部が県大会で上位進出することにより共学校した後も保っている。

質問7. 練習施設について

創部当初は県立校跡地のグラウンドを使用。ベンチやネットは手作りのグラウンドだった。行政側の事情により移転した結果、県内でも最も設備が整ったグラウンドが完成した。

4.2. インタビュー結果の考察

両監督および関係者への半構造化インタビュー調査を考察したところ、図1(a), (b)に示されたようなモデルが明らかになった。

第一に、高等学校硬式野球部の存在意義としては、学生数の確保を狙った地方大学の事例とは異なり、名称変更した校名の知名度アップや学校のイメージ作りが挙げられる。私立X高等学校では共学校化に伴って校名が変更されており、学校当局は硬式野球部が甲子園に出場することによって、新たな校名の知名度が向上することを望んでいたものと推測される。

一方で、学校当局は硬式野球部員の増加よりもチーム強化と生活指導の徹底を優先していることから、生徒数を充足するための方法とする意図は乏しいだろう。

また、公立Y高等学校は女子高等学校当時から文武両道の歴史を蓄積している。そこで、当局は共学校化以降も男子部で同様の校風を維持させるため、市内中学校の教諭だったB氏に同校硬式野球部監督への就任を求めたと考えられる。同校は県内有数の志願者数を誇っているうえ、B監督が推薦入学枠の拡大を求めている状況である。したがって、私立X高等学校と同様に、生徒数の充足と硬式野球部の創部が関係している可能性は極めて低い。

第二に、硬式野球部を強化することによって学校に与えた影響としては、校内の規律維持や卒業生の一体感の醸成などがあげられる。私立X高等学校では、硬式野球部員が学校生活におけるロールモデルとしての役割を果たしていることが評価されている。

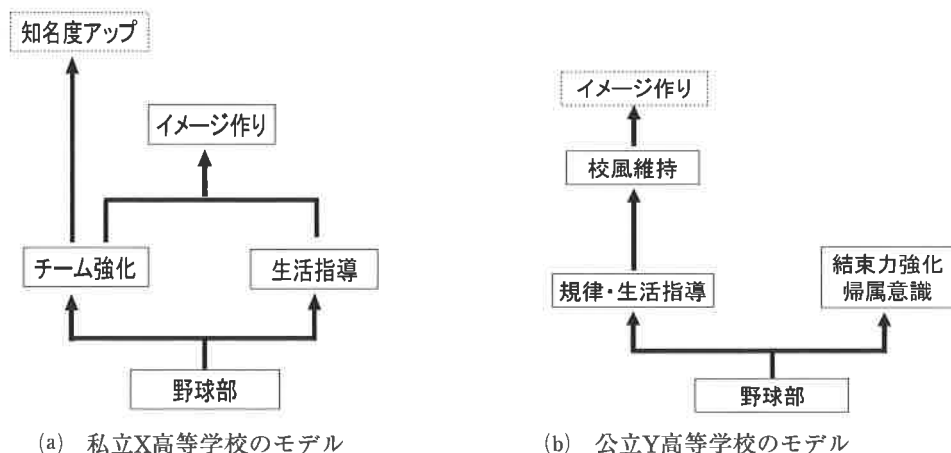


図1 共学校化による運動部強化が及ぼす影響のモデル

また、公立Y高等学校では硬式野球部が公式戦で活躍することにより、卒業生の結束力強化や母校への帰属意識向上といった好影響がみられる。

その反面、注目度が高まった学校のイメージを維持するため、指導者は不祥事防止に対して細心の注意を払うべきであることが示された。

5. まとめと今後の課題

女子高等学校から共学校化した高等学校における硬式野球部の存在意義に加えて、創部とチーム強化が学校に与える影響を検討した。その結果、調査を行った二校では、名称変更した学校名の知名度向上

や学校のイメージ作りを目的として硬式野球部が存在していることが分かった。

そして、校内の規律維持や卒業生の結束を強化する効果が生じた一方で、注目度が高まった学校のイメージを維持するためには部員による不祥事の発生を防止する努力が欠かせないことも示唆された。例えば、広瀬（2009）によると「メディアの露出が増えることは、逆にネガティブな情報の露出も増えるというリスクを抱えることを生来した」と言及しているように、スポーツにより注目度が高まることによるリスクも存在する^v。

また、杉本（1994）は、「どうも、そこに「高校生らしさ」という青春のノスタルジーのドラマが演じられることを期待して観ているのではないだろうか」と言及しているように、特に高校野球においては特有のイメージが認識・期待されている傾向にある^{vi}。これらのリスクや期待を高校野球指導者が強く自覚していることが示唆される。

今後の研究課題は、共学校化する際に硬式野球部のチーム強化を図る事例を引き続き調査することである。冒頭で指摘した通り、地方の高等学校では今後も志願者の減少が続くだろう。したがって、地方大学と同様に運動部を生徒募集の手段として活用する学校が、近い将来必ず登場するものと思われる。大学では授業時間が各選手で異なるために、一日複数回に及ぶ練習方法を効率的に行うことができる。しかし、高等学校での授業時間はほぼすべての生徒が一律に決められていることから、硬式野球部に200人近い選手が在籍する場合には、従来にはない練習システムを構築する必要に迫られるなどの工夫が求められると予測される。

注1 例えば、2004年に選抜高校野球大会で優勝した済美高等学校や、2005年に選抜高校野球大会で準優勝した神村学園高等学校なども、平成4年度以降女子高等学校から共学校化された高等学校である。

注2 清水（1998）によると、「甲子園野球は、様々な文化的要素が複雑かつ重層的に絡み合った文化的パフォーマンスである」と述べ、甲子園の持つ影響力の大きさについて述べている^{vii}。

〈引用文献〉

- i 日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター（2009）「平成20年度版私立高等学校のこれからを考える」、私立経営情報27：25
- ii 日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター（2009）「平成20年度版私立高等学校のこれからを考える」、私立経営情報27：29
- iii 林卓史（2007）「大学全入時代における地方大学野球部のマネジメントに関する研究」、慶應義塾大学健康マネジメント研究科修士論文
- iv 手束仁（2007）「甲子園出場を目指すならこの監督！」、日刊スポーツ出版社：東京
- v 広瀬一郎（2009）「スポーツリーグ産業の構造・特質・リスク」一橋大学イノベーション研究センター編『一橋ビジネスレビュー—ビジネスとしてのスポーツ』、東洋経済新報社：東京、p. 16
- vi 杉本厚夫（1994）「劇場としての甲子園—高等学校生らしさの現実」江刺正吾・小椋博編『高校野球の社会学—甲子園を読む』、世界思想社：京都、p. 23
- vii 清水諭（1998）「甲子園野球のアルケオロジ—スポーツの「物語」・メディア・身体文化」、新評論：東京、p. 269